

自意識の悪循環過程をめぐって

石川 洋明

自意識の悪循環過程に分析を加えることが本稿の目的である。

題材とされるのは、志田基与師の李徴（中島敦『山月記』の主人公）のコンプレックスに関する分析、およびペイトソンのアルコール耽溺者に関する分析である。それぞれの自意識の悪循環は、その論理構造にしたがって「過少決定型」と「過剰決定型」と呼ばれる。これらはともに、ペイトソンのいう「世界との対称的關係」に陥っており、そのために悪循環が解消しないこと、そしてその解消のために、ペイトソンの「学習Ⅲ」が有効であることが示される。

また、自意識の悪循環といえども社会的真空で生ずるわけではなく、それを促進するであろういくつかの条件の存在も議論される。

【0】 作田啓一〔1987〕は、自我論的発想法と役割論的発想法を対比しつつ、次のように論じている。すなわち、役割のなかのひとつが自我と強い連関をもち、いわば「真の自己」として見做される、という自我論的発想が力を失い、どの役割もが平等に演技され、その背後に一貫した自我などというものは存在しない、という役割論的発想が優位を占める傾向がある、と。しかし——作田の問題意識も当然ここにも向けられていると思われるのだが——この二元的対立の帰趨が決するとともに、自我論も葬り去られてしまうのであろうか？

確かに、これまでの社会学における自我論は、役割論との接続において語られてきた。上述の自我論的発想による議論がその典型である。あるいは、相互作用局面における「自己」呈示の多重性を指摘する議論（Goffman〔1961=1985〕など）の登場以来、ある役割と「真の自己」とを同一視することには無理があり、多重的自己呈示のうちのメタ・レベルにあたるものがより「真の自己」に近い、という議論も登場して

きた。だが、残念ながらこの議論は、相互作用の一局面に定位するという議論の性質上、通時的な「自己」に対する目配りを欠くし、自己呈示のメタ・レベルの探査は容易に無限後退に陥っていくため、「真の自己」が明らかになるという確証も得にくい。

自我論研究において、「真の自己」、すなわちその人に特有の属性・資質を明らかにすることは、何を措いても最重要課題に数えられる。だが、役割などの実体的属性でそれを確定しようとする試みは、上述のようにその限界を明らかにしつつある。自意識の悪循環が自我論の題材として選ばれる理由のひとつはここにある。ある個人にとって、自意識の悪循環の過程はとりわけ重要な自我の構成要素である。それは役割のような実体的構成要素ではないが、ある一定の形式をもち、その人の行動の端々に顔を出す。いわば自我の形式的特性といってもよい。作田〔1987〕が指摘したような自我論的発想の行き詰まりも、「真の自己」と見做される自我の構成要素を実体的なものに限定してしまう背後仮

説のためであると考えられるから、この形式的特性への注目によって役割論と自我論の二元的対立を脱却し、自我論に新たな領野をひらくことができるであろう。

そしてまた、自意識の悪循環過程の分析は、循環過程一般について分析するための導入のひとつとなりうるであろう。循環の過程は、人間の精神・身体の活動において、ごく基本的でよくみられるパターンである。⁽¹⁾ごく単純な反復強化学習も、その内部に循環の過程を含んでいる。社会学の分野ではレイベリング理論における「悪の劇化」モデル⁽²⁾が発想を共有している。あるいは、循環過程の論理構造とベイトソンの二重拘束概念⁽³⁾との接続も興味深い。本稿ではこれらの現象は直接の主題とはされないが、それぞれに統編での分析の期される価値ある題材である。

【1】 志田基与師は、魅力的な論文「山月記 syndrome あるいは李徴のcomplex」（志田〔1984〕）のなかで、われわれの身のまわりにもよく見られる自意識の畏について、克明な分析をおこなった。志田が題材として選択したのは中島敦の小説「山月記」であり、その主人公である李徴の心理的葛藤である。「山月記」はよく知られている小説であるから、あらすじの紹介も簡単に済ませよう。

物語は、袁慆という官吏が公務の旅行の途上で虎に襲われ、危うく難を逃れるのだが、その虎が実は進士時代の同期生である李徴が変身したものであった、という設定になっている（この設定を中島敦は中国古典の「人虎伝」から借りているが、心理描写などに中島の創作によるものが多く——またその部分が面白いのだ——随分異なる印象を与えるものにできあがっている）。小説の大部分はそのとき袁慆と李徴との

あいだに交わされる会話——というよりは主に李徴の独白——によって成り立っているのだが、志田はこの「山月記」を「人虎伝」と比較して読み解き、「山月記」に特徴的な「自意識の劇」をあざやかに解剖する。特に注目すべきことは、李徴が虎と化した理由が、「人虎伝」では、病疾による発狂や未亡人との私通を妨げ害を加えようとした家族に対する報復（＝放火殺人）に求められており、志田の言を借りれば「単なる道教的因果応報譚」になっているのに対し、「山月記」では李徴の性格に起因する心理的要素——自意識の畏——が引き金となったことを暗示するような記述が頻出する。

李徴の性格は「博学才穎」ではあるが「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く」つまり自尊心が強く、地方の小官吏などの地位には満足するものではなかった。しかし、官位を投げ捨てて道を求めた詩作でも芽が出ず、やむなく再び官吏になる。しかし、凡庸と見下していた同輩が既に出世して上司になっているなど、自尊心の傷つくことが多く、ついに発狂し、行方不明になった。この後、虎となった李徴が袁慆と再会するのだが、このとき李徴は自分の性格をふりかえり、虎と化した理由を次のように自己分析する（志田はこれを李徴のcomplexと名づけている）。

李徴の外的行動特性は《倨傲》《尊大》であるが、これは《殆ど羞恥心に近いもの》だったり《臆病な自尊心》だったりする。そして、その帰結として《己は、詩によって名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった》。これは《共に、我が臆病な自尊心と尊大な羞恥心との所為である》。志田の分析によれば、この表現は単なるレト

リックではなく、李徴の complex を表現するにはこのような言い方にならざるを得ないという。志田は、自尊心の内実を「ある行為を禁止すること」に、羞恥心の内実は「自尊心と背中合わせの、実際は同一の自意識」であり「ある種の行為を（消極的に）行わせる、という形をとる」ことに求めている。

このような性格特性をもつ李徴の行動はどうなるか？李徴自身の告白に従うなら、《己の玉に非ざることを惧れる》（羞恥心）《が故に、敢て刻苦して磨かうともせず》（韜晦：尊大）、《己の珠なるべきを半ば信ずる》（自尊心）《が故に、碌々として瓦に伍することもできなかった》（禁止：臆病）、という経路で堂々めぐりすることになる。彼自身の結論は、こうした悪循環が《憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になった。……この尊大な羞恥心が……己の外形を斯くの如く内心にふさはしいものに變えてしまった》、というものである。

上記の要約で、李徴が自意識の罠に陥っていった過程はおおよそ理解されよう。これをひきおこす心理的機制（＝李徴の complex）を志田は以下のように定式化する（論理構造を明確に示すため、引用者が一部手を加えている）。

- (1) 守るべき「自分」があり、この「自分」について肯定的な評価（「才能ある者」「個性ある者」など）をくだしている。
- (2) このような「自分」にとって最も望ましいのは「才能」「個性」のある者であることが証明されることである（その具体的な手段は何でもよい）。
- (3) しかしながら「自分」にとって最も恐ろしいことは、「才能」「個性」などが無いことが証明されてしまうことである。
- (4) そこで「自分」を守るためには、消極的に

「才能」「個性」が反証されない状態にとどまるのがよくなる（→臆病な自尊心！）。

(5) よって彼は「自分」の「才能」が試されないことなら行ない、「才能」がテストされる時行動を避ける。そして、自らの「才能」が示されないのは「押しつけられた諸事情のため」と合理化する。

(6) しかし、このような生活態度を有限の人生のなかで続けても「自分」の「才能」は証明されず、それが時に大きな精神病理をひきおこす。

【2】 ベイトソンの「自己のサイバネティックス——アルコール依存症の理論」によれば、アルコール耽溺者は、自己のなかに深くしみついた「プライド」の原理をもつ。そしてそのプライドがどのようなメカニズムを内包しているものであるかは、以下の通りである（Bateson [1971b→1972=1987:460-462]⁽⁴⁾）。

(1) 「プライド」が、本人が過去に為しとげた何かをめぐって成立するコンテキスト内で醸造されたものではなく、よって何ら誇るべき実体をもたない。強調点は「オレはできたぞ」ではなく、「オレはできるぞ」にある。「オレにはできない」という命題を受け入れることができず、取りつかれたようにチャレンジを繰り返す。

(2) アルコール依存症に病むようになって以後、このプライドは、「オレは素面でいられる」という命題に集中的に駆り出される。しかし、これに成功することは、自己への“チャレンジ”そのものを消してしまふ。ここで A A (Alcoholic Anonymous)⁽⁵⁾ のいう「不敬な自信」が頭をもたげ「ちょっと一杯」という気持になる。すなわち、覚醒が確証されることで覚醒のコンテキスト構造が変

化する。最初は「素面であること」が「オレはできる」という気持を成り立たせるコンテキストとなっていたわけだが、それが成功することで、今度は「一杯のリスク」が自己への挑戦となり、それを冒すことのできる自己がプライドの対象になる（しかし、この挑戦は常に泥酔へと陥り、失敗する）。

(3)このコンテキスト構造の変化を食いとめることにAAの努力は集中して向けられている。例えば「一度アル中だった者は一生アル中である」という教えの徹底によって、崩れてしまうコンテキストを繕いつづけ、「アル中」を患者の内側にしっかり固定する（ユング派の分析医が患者に自分の「心理型」を発見させ、その型に備わった強さ・弱さとともに生きることを学ばせるのと似ている）。それに対し、逆に、アルコール耽溺者の「プライド」は、飲酒への耽溺を自己の外側に——“自分”が“飲むこと”に“抵抗”する、という形で——置く。

(4)アルコール耽溺者の“プライド”を構成する「チャレンジ」要素は「危険を冒すことができる」というものである。この信条は素面状態の継続の役には立たず、成功の確率が高まると「一杯のリスク」に対して挑戦がなされる。「確率」「運」といった概念は失敗を自己の外側に追いやる。“プライド”は経験を視野外に置くことにより「自己」をどんどん狭くしてゆく。

(5)賭にプライドを求めるとい生活原理は自己破滅的である。宇宙が自己に好意的かどうか一度の賭で知ろうとするのはよいが、この賭を繰り返す（しかも証明の条件をだんだん厳しくしてゆく）のは宇宙の悪意を確認することにほかならない。

【3】 この2例とも、プライドあるいは自尊心とよばれる心理が重要な意味をもっている。そして、この心理状態にとらわれた者は、そこから逃れることができず、ずるずると悪循環に身をさらし、苦しむこととなる。しかし、この2例に見られる悪循環の型は、やや異なったものであるように思われる。例えば、後者のアルコール耽溺者は飲酒に対してある種の積極的な正当性——「コップ一杯くらいで自己管理能力を失わないことを示すため」など——を用意していたわけだが、前者の李徴は、自分が能力を示すための行動をとらないことに対して積極的な理由を発見できず、よって後ろめたさを拭いきれなかった、というような差異が見られる。この違いはどうか解釈すべきなのか？

まず、明らかに前者の「李徴のcomplex」の方がより単純な形態だと考えられる。すなわち、李徴の持っているのは「逃避」あるいは「先送り戦術」とでもいうべきものであって、そのために課題が片づかないのである。

アルコール耽溺者の行動の中にもこのような先送りは発見できよう。例えば、飲酒を止めなければ、と思いつつずるずると止められず、「来月からは禁酒しよう」などと決断を先に延ばし続けるようなパターン。このような単なる怠惰によってももちろん悪循環はおこる。そうやっつずるずると酒を飲み続けていけば、いずれアルコール中毒の身体症状もでてくる可能性は高い。禁酒の先送り、という事態は、本人のプライドの強さ、禁酒できない自己に対する評価の厳しさの程度に応じ、様々な状態をとりうるであろう。しかし、禁酒できずに日々を送るうちに、アルコール耽溺の程度は進行し、身体はますます危機的な状態に陥っていく可能性が高い。

しかし、単なる怠惰によって悪循環に陥る人

間と異なり、李徴 complex にとらわれた人間は、自分の能力を証明することに固執し続ける点が特徴的である。であるにもかかわらず、そのような証明の機会が与えられても、その結果に対する不安のため、何とか言を左右にして逃避する。この自己の能力についての信頼と不信のアンビヴァレントな同時存在こそがこの悪循環を形づくるといってよいだろう。単なる怠惰には、この自己信頼の契機が薄弱であり、それゆえに不信も深刻なものとはならない。

このように、当該の個人にとって緊要な課題設定とその解決行動の不在を成立の要件とする悪循環を「過少決定型」とよぶことにしよう。このような悪循環に対する処方箋はどのようなものになるであろうか？もちろん、課題がなくなってしまうえばアンビヴァレントな状態はなくなり、悪循環を脱することはできる。例えば、諦めることによって課題を消してしまおう、という方法。それもひとつの解決の方策である。しかし、当該の個人にとっては緊要だった課題は解決されることなく葬り去られることになってしまう。その人が本当に諦められればよい。しかし、もし少しでも諦めきれない部分が残れば、この課題を生かしつつ悪循環を解決するしかないのならば、課題を実行するしかない。しかも、それができずに悪循環に苦しんでいるというのに。

このとき、ベイトソンのいう「学習Ⅲ」⁽⁶⁾がその解決の契機となることがある。すなわち、この悪循環の成立のメカニズムを知ることがそこから脱出の契機となるのである。例えば、李徴の complex においては、能力を示すことが課題であり、それが臆病な自尊心などから実行に移せない＝実現しない、というのが解決行動の不在である。この構造を十分に知ることによって、以下のような解決を考えることができるかもしれ

ない。まず、可能態として能力を考えるのを止め、実際に解決行動を実行に移せていないということが能力の欠如をあらわすものだ、と考える。これによって、課題が当該個人にとって緊要なものでなくなる（例えば、諦めがつく）ことがあるが、前にも述べたように、これもひとつの解決である。また、能力を示すという課題に関していえば、パフォーマンスに解決行動をおこなうことが課題の解決そのものなのだから、実行あるのみ、という解決もあるかもしれない。もちろん、部分的には諦めて部分的には実行あるのみ、という2つの方策の中間形態もありうる。

しかし注意しなければならないのは、ここでいう「知る」という言葉の含意である。悪循環に陥った者は、通常、自分がそういった状態にあることも、解決行動の方策も理解することはできる。しかし、そういった形で「知った」ところで、悪循環過程は何ら本質的には変化しない。それを脱するためには「知行一致」的な「知る」ことが要求されるのである（この点でこの「知る」という言葉の中にいわゆる仏教的な知のあり方と同様な方向を発見することもできるであろう）。

【4】 それでは、後者のアルコール耽溺者の場合、悪循環の構造およびそれに対する処方箋はどのようなものになるだろうか。

ベイトソンの考察にしたがうならば、このアルコール耽溺者の悪循環の構造は彼のいう「対称的分裂生成」のパターンをなしており、それゆえにこの悪循環がアルコール耽溺者を苦しめるのである。以下、ベイトソンの分析を検討しながら考察を進めていくことにしよう。まず、ベイトソンは、およそ関係とよばれるものすべてを、対称型と相補型とに分類する。ベイト

ソンの定義を引用してみよう。

《二者関係において、AとBとの行動が（AとBとによって）同じものとして見られ、しかもAの行動の強まりをBが刺激して同じ（とされる）行動を強め、逆にまたBの行動がAの“同じ”行動を促進するようなかたちで二つが連係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は「対称的」（symmetric）であるという。》

《たとえば見る行為と見せる行為とが互いにフィットするように、AとBの行為が同じでないが相互にフィットするものであり、しかもAの行動の強まりがBの行動の強まりを呼ぶようなかたちで両者が連係しているとき、それらの行動に関して両者の関係は「相補的」（complementary）であるという。》

（Bateson [1971b→1972=1987:462-463]）

ベイトソンによれば、相補型の関係も対称型の関係も、彼が「分裂生成 schismogenesis」と呼んだ漸進的な強まりの運動に走る傾向をもつ。分裂生成が現れる原因は、対称型および相補型のどちらの型のシステムにもポジティブなフィードバック機構が組み込まれている点に求められている。これは上述の定義からも明らかであろう。ただし、2つの型の混交システムでは、分裂生成にブレーキがかかるという指摘もなされている。

これらの概念は、アルコール耽溺者に関する分析に適用することを十分念頭において導入されている。すなわち、ベイトソンによれば、アルコール耽溺者のプライドは対称的関係のコンテキストのなかにあるという。ひとつには、飲酒という習慣そのものが、西欧文化のなかでは対称的な——相手と同じことをする（=同じだけ飲む）ことが期待されるような——行動原理をもつとされるからである。

アルコール耽溺者のプライドに関するベイトソンの分析を【2】で紹介した際にも述べたことだが、アルコール耽溺者は自分の（酒に対する）強さを証明しようとして酒にたちむかい、結局酩酊状態へと落ち込んでいってしまう。ベイトソンの論文のこの節が「プライドに溺れる」と題されているのは、きわめて示唆的である。まさに、この種のアルコール耽溺者は「プライドに溺れ」ていってしまうのだ。ベイトソンのことばをさらに借りるならば、《世間の狂った前提への反抗として飲酒に走るのではなく、世間によってつねに強化されつづけている自分自身の狂った前提からの脱出を求めて飲酒に走る》のである。この《自分自身の狂った前提》とは、《耽溺者自身が——醒めているあいだは——自分の「弱さ」にこそ「問題」があるのだと、一般に考えている点》である。すなわち、彼は自分が弱く、しかも自分自身でそれに打ち勝たねばならないと考えている（=対称的パターン！）。そしてまた、周囲の人々も「もっと強くなれ」「酒の誘惑に打ち勝て」と叱咤することで、《自分（=彼）自身の狂った前提》を強化しつづけることになるのだ。ここでは、アルコール耽溺者が「アルコールに耽溺してしまいう弱い自己」と「それを矯正しようとする強い自己」との2つに分裂していると解釈できる。そして、「アルコールに耽溺する自己」は、そうでないということを証明するために、まずはアルコールから我が身を遠ざける、という選択をする。しかしこれは、「アルコールへの耽溺を矯正する強い自己」にとってみれば容易すぎる選択に思え、結局アルコールを飲んでも乱れないということを証明する、という選択をなしてしまうのだ。

ここで起こっているのは、つまりは、課題の高度化である。そして、この高度化した課題

は、アルコール耽溺者の本来の課題、すなわち過度の飲酒を慎むことにとっては破壊的な効果をもたらす。アルコール耽溺者が一杯飲んでしまったらどうなるか？当然二杯、三杯と杯を重ね、最終的には泥酔に至るのは火を見るより明らかである。ここにアルコール耽溺者の悪循環過程が成立するわけだが、この悪循環過程で注目すべきことは、アルコール耽溺者が「一杯くらいのアルコールで自己管理がくずれたりはしないことを証明する」という自己正当化の論理を用意して飲酒することである。もちろんこれはアルコール耽溺者による論理の歪曲・錯覚にほかならないわけだが、少なくとも彼らの視点からは、この時点で飲酒が課題解決に反する行動から課題解決行動そのものに転化していることがまた注目に値する。いわば、アルコール耽溺者は、自分のアルコール依存を脱しようとして、アルコール耽溺に再び陥るのである。このように、課題と課題解決行動の矛盾を含む悪循環過程を「過剰決定型」の悪循環過程とよぶことにしよう。

「プライドに溺れる」という事態はさらに進展する。すなわち《事態の悪化につれて、耽溺者は、酒と一緒に自分の世界に閉じこもり、自分に相対するものすべてに、あらゆる敵対と挑戦の構えでのぞむようになる。「飲むのは意志が弱いから」と諭す妻や友人に対して、彼は対称のパターンにそって反発し、自分の強さをボトルへの抵抗をもって証明しようとする。しかし、対称型の反応のつねであるが、闘争にひとしきりの勝利を得たあとは、闘いの動機が弱まる。それでまた酒びたりの自分へと、すり落ちていってしまう》(Bateson [1971b→1972=1987:466]) というような事態である。ここでは、プライド——対称型のパターンの代表的なものの一つである——が、自分のみならずそれを指

弾する他人に対しても向けられていくことになるのだ。

AAのアルコール耽溺者治療プログラムである「12のステップ」のなかで述べられているのは、《アルコールとは戦えない——そんな力は自分たちにはない——ことを認めるのが、更生への第一のステップなのである》ということである。この第一ステップ——降伏とよばれる——はすなわち、対称型の分裂生成の前提の破棄を意味する。そして、ベイトソンも指摘するように、対称型の前提の破棄は、相補型のパターンへとアルコール耽溺者を向かわせるはたらきをする。そして、AAによって治癒された人々の認識論は、激しい対称型から純粹ともいえる相補型へと変化しているという。

【5】 「一杯くらいのアルコールで自己管理がくずれたりはしないことを証明する」という正当化をとまなり飲酒——これはもちろんアルコール耽溺者による論理の歪曲にほかならないわけではあるが、アルコールに対して打ち克つ、ということ強調する社会的な文脈のなかでは、このような論理のすりかえじみたことがときに起こってしまうのである。前述のように、この点を看取することでベイトソンは対称的分裂生成へと向かう契機を見出したのである。しかし、アルコール耽溺から抜け出すことのできた人々のすべてが対称型のメンタリティから相補型のメンタリティへと変化したことによって成功したというわけではない。例えば相補型のメンタリティの持ち主は、相補型特有の支配に対する弱さのためにアルコール耽溺へと陥ってしまうということも考えられる(ベイトソンは、相補型の分裂生成の代表的パターンとして、見せる／見る、保護／依存、支配／服従などをあげている)。重要なのは、対称型メンタ

リティが自己正当化を伴った悪循環とかなり親和的である、ということである。何かに打ち克たねばならない、というメンタリティはそもそも対称型のものである。そして彼らは、自分がアルコール耽溺へと陥る経路について「学習Ⅲ」するのである。彼らは、自分たちが陥っていた循環について論理的な知識を得るのではない。しかし、彼らは「降伏」によって、自分たちがおこなっていた自己正当化が単に悪循環の一部品に過ぎないことをパフォーマティブに学習する。自分たちの「強さ」への希求が悪循環をさらにおしすすめるだけだということを身をもって知るのである。では彼らは何故相補型の悪循環へと陥っていつてしまわないか？おそらくは彼らのなかに残っている対称型の要素（克己心など）が相補型と組み合わせることでサイバネティックな——逸脱縮減的な——循環を形づくるため、ということが理由のひとつとして考えられそうだ。《AAメンバーの語るところによると、絶望の底で自殺を食いとめるのも、往々にして自尊の気持であることがうかがえる》(Bateson [1971b→1972=1987:462]) というコメントは、示唆的である。

それと同時にここで注意をしておきたいのは、相補型のパターン、という用語の含意である。先にも述べたように、ベイトソンは対称型と相補型の2つの分裂生成の型を定義した。すなわち、相補型のパターンをとる場合でも、分裂生成からランナウェイへと陥り、ついにはパターン破壊にまで深化していつてしまう場合（相補型の悪循環）もありうるだろう。しかしここでベイトソンが述べている「相補型のパターン」とは、個人間、あるいはサブシステム間の相補的關係ではなく、個人あるいはサブシステムが環境全体と取り結ぶ關係のことでありと考えられる。ベイトソンは、この論文のむす

びにあたる「仮説の限界」で以下のように述べる。

《人間のやりとりが、すべて相補的なものであることが好ましいという主張もなされていない。ここではただ、個人とそれをつつむシステムとが、必然的に相補的關係をなすと指摘されているだけである。個人同士の關係は、もっと複雑である（ことが望まれる）。》

(Bateson [1971b→1972=1987:481])

【6】 以上、李徴の complex とアルコール耽溺者の二例について、おもにその相違点をめぐって考察をすすめてきた。次に、この二例の共通点についての分析を若干試みてみよう。もちろん悪循環一般の性質とこの二例の共通点とはまったく同一のものではないと思われるが、ここではこの二例に関連する悪循環の性質を主に扱いつつ、悪循環一般に関してもある程度考察することにした。

ここで指摘したいのは、世界との対称的關係、ということである。上で述べた「相補型のパターン」は、個人あるいはサブシステムが環境全体と取り結ぶ相補的關係のことであった。世界との対称的關係とはその対概念と考えてよい。それは、例えばベイトソンの表現を借りるならば、《賭にプライドを求め、それを生活原理とする》ことであり《この賭を繰り返す——しかもその度に証明の条件を厳しくしていく——》ことである（→Bateson [1971b→1972=1987:461-462]）。この引用にある通りのことが、李徴 complex においてもアルコール耽溺者においてもおこっている。両方のケースにおいておこっている「課題の高度化」を思いおこしてみよう。アルコール耽溺者が課題を高度化し、ついには過剰決定的悪循環の状態をひきおこすに至るのは、前に述べた通りである。また、李徴

も課題の高度化をおこなってやまない者のひとりである。彼は進士の試験に合格するほどの秀才であるから、官吏としてある程度以上の栄達と富は望めただろうし、それによって幸福を感じずることもできたであろう。しかし、彼の内なる上昇志向と競争心(=優位志向)とが彼をそこに止まらせなかった。そして彼はより新しくより高い目標にチャレンジし、その結果あのような悪循環に陥っていったのだ。優位志向とは厄介なもので、比較対象をどんどん拡げていくことによって、事実上無限にその競争心を持続させていくことができる。単に特定の間人などではなく世界と対称的關係にある、とはこのような事態を意味する。環境にあるすべてのものごと・人々が、対抗すべきものとしてたちあらわれてきてしまうのだ。

しかし、すべての悪循環が課題の高度化をとまらうか、という問題に対する回答はおそらくN0であろう。また、自意識の悪循環がすべて課題の高度化をとまらうものかどうか微妙である。サン・テグジュペリの『星の王子さま』に登場する、酒を飲んでいる恥ずかしさを忘れるために酒を飲み続ける酔っ払いの例を考えてみよう。彼の行動は間違いなく悪循環している。そして彼は自分のやっていることを恥じており、そういう意味では自意識の悪循環をひきおこしている。しかし、彼は課題の高度化をおこなってはならず、十年一日の如く同じ悩みに同じ解決策を繰り返しているようである。これはどう解釈すべきか？おそらく彼の悩みとは、飲酒に関する自己管理の欠如、すなわち酒が彼を支配し彼は酒に服従する、という状態についての後ろめたさとして考えることができるだろう。そしてその後ろめたさを解決する方法として酒による忘却を選ぶが、これはもちろん課題に矛盾する課題解決行動である。よって、この悪循

環は、相補的かつ過剰決定型の悪循環とよぶことができるであろう。

さて、これらの悪循環過程の解決の方法であるが、学習Ⅲをすることによって解決がもたらされる、ということをも以前より再三強調しておいた。学習Ⅲとは、ゼロ学習、学習Ⅰなどとの対比において定義されることばである。ベイトソンの定義を引用するならば、

〈学習Ⅰ〉とは、反応が一つに定まる定まり方の変化、すなわちはじめの反応に代わる反応が、所定の選択肢集合のなかから選びとられる変化だった。

〈学習Ⅱ〉とは、〈学習Ⅰ〉の進行プロセス上の変化である。選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる、その区切り方(punctuation)の変化がこれにあたる。

〈学習Ⅲ〉とは、〈学習Ⅱ〉の進行プロセス上の変化である。代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化である。(のちに見ていくように、このレベル変化を強いられると人間とある種の哺乳動物は、時として病的な症状をきたす。))

(Bateson [1971a→1972=1987:418])

強調しておきたいのだが、このような学習Ⅲも、実際に遂行されなければ何にもならない。上記の引用にも明らかなように、ベイトソンの学習の定義は行動学的なものであり、実際の行動の変化を以て学習を定義している。しかし、人間の場合、「わかった」「理解した」ということばのみで実際の行動は何も変化しないことが余りに多いことは周知の事実である。前出の、「知行一致的な知」という表現は、この点における人間の言語と行動のギャップ(これも往々にして悪循環過程の部分品のひとつである)の克服を含む学習の必要性を説いたものと考えら

れる。悪循環の克服の方法は、結局のところこのような単純なポイントが本質であるようだ。

次節では、作田〔1981〕の『こころ』の読み解きを題材にして、悪循環の脱出を試みたが失敗した例を検討してみよう。

【7】 作田啓一がルネ・ジラルの文芸批評にヒントを得て書き下ろした『個人主義の運命』（作田〔1981〕）のなかに、ジラル的な三項図式を日本の近代小説の読み解きに応用した部分がある。この著作は、ジラルの「三角形の欲望」理論の紹介と応用以外にも、個人主義の系譜についての洞察など、非常に含蓄に富んだ、得るところの多い研究である。以下では、その一部分である夏目漱石の『こころ』の分析を下敷きにしつつ、それを悪循環過程として読み解くことを試みよう。

作田〔1981〕の示唆するところによれば、主人公である「先生」と「K」とは、一見そうは見えないのではあるが、師弟関係といってよい（そのことを暗に示すため、「先生」と「K」とが登場する前に「私」と「先生」との師弟関係が描かれた、という説を作田はとる）。そして、この師弟関係とは、モデル＝ライヴァル関係のひとつの典型といってもよいほどのものなのである。さて「先生」は下宿先の「お嬢さん」に愛を感じず、彼女の母親の策略を疑い、結婚の申し込みをためらう。そこで尊敬する友人である「K」を下宿の同居人として連れて来て、「お嬢さん」が結婚に値する女性であることを「K」に保証してもらい、このような女性を妻とすることを「K」に誇ろうとした。しかし、「K」が「お嬢さん」の価値を保証するということは、「K」が「お嬢さん」に好意を抱くことにほかならない。ここで、「先生」の手本（モデル）である「K」は同時に「先生」のライヴァ

ルともなる、というアンビヴァレンスが発生する。このアンビヴァレンスは「先生」が「K」を下宿に連れて来たときから予定されていた矛盾であり、結果的には「先生」が「お嬢さん」という客体を得て、「K」というモデル＝媒介者を失うこととなった。すなわち「先生」は、「K」よりまさる部分、つまり財産と生活者としての知恵でもって恋愛の勝者となったが、このやり方に「先生」自身は嫌悪感を抱いており、そのうえ「K」はこのような「先生」のやり方に対し何の恨みも言うこともなく潔く自殺してしまったので、「先生」の恋愛の勝利による優越感はこの「K」の態度によってすぐさま打ち碎かれてしまった。そしてまた「K」の自殺によって「先生」は、「お嬢さん」への愛情の模倣対象＝モデルをも失ったことになる。結婚後の禁欲的な生活は、このモデル喪失によって説明がつく。つまり「先生」の「お嬢さん」への欲望は「K」という内的媒介があったからこそ結婚へと結びついたのであり、この内的媒介者がいなくなれば「先生」の欲望が鎮静するのは当然の成り行きなのだ（→作田〔1981:135-140〕）。

このような状況を、悪循環過程として描いてみよう。「先生」を中心に考えるならば、ここには3つの課題が設定されている。すなわち、①「お嬢さん」を獲得すること、②「お嬢さん」が愛するに足る女性であることが証明されること、③「K」が尊敬に値する人物であることが証明されること、という3つである。「先生」は当初①と②の課題の未解決に悩んでいた。この時点では「李徴の complex」に見られた過少決定型と同じ構造であり、この状態のまま悩み続ければ「先送り」と同じ状態に陥ったであろうことは明らかである。そこで「先生」は、②の課題を解決するために、尊敬すべき友人である

「K」の助力を得ようとした。しかし、この問題解決行動は新たな問題を引き起こす結果となる。つまり、「K」の保証によって②が解決すると、②と①が同時に成立するならば③が成立せず、②と③が同時に成立するならば①の成立があやぶまれる、という、いわば過剰決定とでもいべき事態が出現するのである。もしこの時点で「先生」が結婚を決めることを躊躇していたり「K」が自殺その他の方法で身を引いたりしていなければ、この未決定状態のまま悩みが続く、という悪循環状態になっていたことは容易に推測できる。

さらに考察をすすめるならば、「先生」が結婚申込に踏み切り「K」が自殺する、という事態が生じた後でも悪循環の構造は残存していることがわかる。すなわち、まず「お嬢さん」の魅力についての②の課題は、作田も指摘していたように、結局「K」が三角関係に参入する以前の未決定状態に戻ってしまう。「先生」の心中にあるのは、無辜な「お嬢さん」を三角関係にひきずりこんでしまったことに対する負い目であり、「お嬢さん」が愛するに値するかどうか、という問題に関しては解決されないまま宙吊りになってしまったと考えてよいだろう。

「先生」の禁欲的な結婚生活がそれを傍証している。正確に言えば、この時点ではもう「先生」と「お嬢さん」は結婚しているのだから「結婚に値する女性かどうか」という問題は解決されている。しかしこの問題は、結婚後には「妻として愛するに値する女性かどうか」という形に変形して未解決状態のまま残存していることは想像に難くない。日本的な文化規範にしたがえば、恋愛時代はともかく、結婚後は「妻が愛するに足る女性かどうか」という問題は重要な課題として設定されたりすることは通常はないので、この未解決状態が結婚に関する意志

決定の際のような顕在的な悪循環をひき起こすことはない。しかし、家庭内の冷たい雰囲気や不和がこのような未解決の問題を原因のひとつとして発生し、なおかつ悪循環する傾向がある、ということは十分考えられることである。

この悪循環の過程に対し、どのような処方箋を書くことができるだろうか。まず、「先生」が課題②と課題③との過少決定に悩んでいたのだから、その過程全体に関する学習Ⅲをうながすことがまずは第一の処方となるであろう。しかし「先生」は、この過少決定を解決しようとして「K」を三角関係的な場に引き込んだ。このことは結局何の解決にもならず、かえって問題を増やしたに過ぎないことは、前に見た通りである。作田〔1981:145-146〕によれば、「先生」は個性の個人主義を信奉しながら同時に欲望の個人主義にもとらわれていた点、そしてその欲望の個人主義にとらわれていることにほとんど無知であった点にその罪があるという。これは、自律性を尊重しながら自己決定を欠き、しかもその自己決定の欠如に関しても気付いていない「先生」の問題状況を的確に表現したコメントであるといえよう。

あるいは、モデル＝ライヴァル関係に内在する問題も指摘できる。「先生」は、②の課題を、例えば仲人などによる保証で解決することができたかもしれない。これは、①②の過少決定に対する根本的な解決策とはなりえない惧れはあるものの、「K」が登場することによってひきおこされた悲劇に比べればまだましな解決方法であろう。そもそも、モデルでありかつライヴァルであるという状態は、矛盾に満ちたものである。モデルは模倣の対象であり、モデルと模倣者はある種の相補的な関係を取り結ぶことになる。しかしライヴァル同士は、明らかに対称的な関係を取り結ぶものである。確かに、モ

デルでありライヴァルである他者の存在とそれにともなう問題——例えばある時期モデルであった他者を目標とするあまりにライヴァル意識が生じかえって関係がぎくしゃくすること、など——は、日常生活のなかでもよく経験することである。しかし「先生」と「K」との場合は、「お嬢さん」という特定の個人に対する愛情に関するモデル＝ライヴァル関係であり、しかもモデル関係とライヴァル関係が同時に成立する必要があったため、相補性と対称性との矛盾はとりわけ深刻なものになってしまった。モデル関係を維持する観点からは「K」の優越は動かない(③の課題の貫徹)が、ライヴァル関係の原理からすれば「先生」は勝たなくては「お嬢さん」を手に入れることはできない(①の課題の達成)。これは明らかに同時成立不可能である。

常識的に考えれば、②のような課題が対他的なものとして設定されていることが(あるいは①②が過少決定になってしまうところが)この状況の最大の問題点といってよいだろう。やはり、愛すらもモデル＝ライヴァル関係によって補給・決定されなければならない「先生」のパーソナリティ・システムが悪循環を招きその後の悲劇を招く大きな要因となったことは否定しえない。そしてまた、「先生」の誤りは、自身の内部の過少決定が外部の条件を導入することによって解決できると単純に思っていた(あるいはそれすらも考えないでただやみくもに外部条件を導入した)ことにある。前にも述べたが、②の課題は、仲人による保証でもよかったのだ。見合い結婚という制度はしばしばこのような解決によって結婚を成立させてきた。その際には、②の問題解決のため要求される水準が低い、という事情はあっただろうが。ところが「先生」の場合は、そういう水準で②の問題が

解決されないタイプの間人であった(「先生」自身そういうことを無意識のうちに知っていたために「K」に頼ったのかもしれない)。そして、「K」の欲望という外部条件を導入した。この場合、ひとつには「K」の欲望がモデルかつライヴァルになる、という矛盾＝同時成立不可能性に気づかなかったのが大いに問題である。しかし、それよりもやはり、①②の課題が過少決定になってしまう自分自身の欲望の構造について何も気づかず、欲望の模倣という方策を単純に選択してしまった無知に問題がある。ここで必要なのは、自分自身の欲望構造の変化をともなう「学習Ⅲ」である。

【8】 悪循環過程はしばしば閉じられた循環であり、そこからは容易に逃れることはできない。循環とはそもそもそういうものだ。しかしながら、例えば「よい」循環ならば、誰も逃れようとしないから、それが閉じられた循環であることを当事者がそもそも問題にしない。むしろ、閉じられた循環であることが問題になる状況、すなわち循環のなかにいる当事者が離脱を欲している、ということが問題とされなければならないであろう。そして、その原因は明らかである。当事者がその循環のなかでは目的を達成できないからである。

おそらく、このような循環のなかでは、自身で達成できないような目標を選択したり解決行動をおこなう能力を欠いたりする当事者の方にその責任を求めることが一般的であろう。しかし、その目標選択を動機づけるきは、当事者の個人的事情と同時に、当事者の暮らしている社会の社会的・文化的な規範であることを忘れてはならない。志田は、李徴がそのような自意識の罠に落ちたのは(というより、そういう人間としての李徴を中島敦が書いたのは)彼のなか

に近代人の特徴である「作為の契機」が存在していた（存在するように創作されていた）からであるという。なるほど、道教的な因果応報譚である原作「人虎伝」のなかには作為の契機が「山月記」ほど強くはでていない。また、伝統中国に典型的な考え方からすれば、詩作に励んでなおかつ詩の世界で認められないならば、それはもともと才能がないから、と判断されるといわれる。いわば結果から逆算して才能の有無がはかられるというわけである⁽⁸⁾（この考え方も因果応報的な論理が——逆向きだが——貫徹しているように思われる）。このような文化のもとでは、「山月記」の李徴がもっていたような“臆病な自尊心”は維持しえない。自尊心のよりどころとなる能力・才能の有無が可能態として存立しえず、よって将来の証明を待つという宙吊りの状態が長続きしないからである（そしてまた、この道教的な因果応報の論理が【3】で述べたような先送りの悪循環に対する学習Ⅲと同等の機能をもっていることは注目すべきことである）。

もちろん、近代においてすべての人間が李徴のような complex をもつわけではない。また、近代以外の社会において李徴のような complex をもつ人間がまったく存在しえないというわけでもない。しかし、近代において李徴のような自意識の異にかかる人間が増えること、その前提条件を近代という社会が（部分的かもしれないが）用意するということは言ってもよいのではないか。例えば、アイデンティティ・クライシスを経験する人間は、自己定義をなさねばならない、という課題と、自己定義をなすための積極的な要素が何もない、という事実との過少決定的な悪循環に悩むわけであるが、この過程は職業選択、人生の指針の自己決定、といった課題をもつ社会に特有のものと考えられ

る。自己定義をなさねばならない、といった課題がなくなったり、自己定義のための積極的要素がなくても社会的無能力者とは考えられなくなる、といった社会的評価の基準が変化したりするならば、この種の悪循環には陥ることがなくなるのである。

社会における関係的資源（地位・役割など）のうち、自己定義のための積極的な要素として人々が用いるものは稀少である。しかもその稀少性によってひきおこされる競争に関する調整メカニズムや、競争の敗者におこる抑圧などについては、社会はあまり回収の方法を用意しているとは言い難い。むしろその稀少性を助長するようなかたちで社会的価値や文化目標が分布している例が多い。そのような社会的価値の配置が変化し多様化するだけでも自意識の悪循環過程を招く外的条件は減少すると思われるのだが、社会的価値やそれに関する能力の偏在さえも——例えば教育投資の階層差を通じて——（悪）循環的に再生産されることがある。ともあれ、このような社会的価値・文化目標の偏差によって失敗回収の文化的プロセスの偏差が生ずることは確かであり、これに対応させて自我形成過程の偏差を記述し分析することが今後の重要な課題のひとつとなる。

* 本稿は、日本社会学会第60回大会一般研究報告「相互作用における「自我」——自我形成過程としての悪循環過程を中心に——」（1987年10月3日）に加筆・修正したものです。本稿の成立にあたって助言をいただいたすべての方々、特に吉田民人、志田基与師、橋爪大三郎、田崎英明の各氏のあたたかい御指導に心より感謝いたします。

注

- (1) ベイトソンは精神—身体二元論を克服するよ
うな新しい「精神」概念を提案しているが、そ
の定義のひとつとして「精神過程は、循環的
(またはそれ以上に複雑な) 決定の連鎖を必要
とする」と述べている (→Bateson [1979=198
2:140-149])。
- (2) 「悪の劇化」とよばれるレイベリングの過程は、
初発の逸脱によってラベルを貼られた個人が、
そのラベルによってライフ・チャンスを大幅に
制約され、結局犯罪者の経歴をたどる、という過
程である (→大村・宝月[1979:211])。
- (3) 二重拘束は、ベイトソンが精神分裂病の病因
論として提出した概念であり、①正確に識別す
ることが重要と感じられるような密な関係の中
にある個人が包摂されている、②関係の中にい
るもう一方の者が、互いに否定しあう2つの
メッセージをだす、③①の個人は不整合を解く
ためのコメントを妨げられる、④その場から去
ることも禁じられている、という4つの条件に
よって成り立っている (→Bateson [1956→197
2=1985:295-329] など)。②の条件によってこ
の関係の中の個人は相手のメッセージの意味の
不決定状態に陥る。そしてこの状態はしばしば
家庭内での個人とその人にとって重要な他者
(子供と母親など) との間におこり、意味の不
決定は愛情に関する不決定状態——愛情がある
ともないとも判断できず、あると判断してもな
いと判断しても罰せられる状態——をともなう。
- (4) ベイトソンがここで描くようなアルコール耽
溺者が、全世界的な広がりをもつものか、ある
いはある文化圏に偏って分布しているものなの
か、という問題も大いに興味深い。飲酒習慣の
文化圏による差異については清水 [1980a] な
どを参照のこと。
- (5) AA (Alcoholic Anonymous) とは、1915年
頃アメリカにおいて、ビル・Wおよびドクター
・ボブという2人のアルコール中毒者が互いに
励ましあううちに生まれた、アルコール中毒者
更生のための自助組織である。現在約100万人
の会員を擁するが、その絶対的な匿名主義、そ
して政府等の援助から完全に独立した会員の寄
付による運営に特徴がある (→下司 [1980:20
0])。日本における類似の組織としては断酒会
があり、下司孝麿と松村春繁の創設による全日
本断酒連盟 (全断連) が特に有名であるが、非
匿名主義や宗教からの独立などにAAとの相違
が見られるという (→下司 [1980], 清水 [198
0b], 北條 [1980])。
- (6) Bateson [1971a→1972=1987] によれば、論理
階型理論の適用によって、ヒエラルキー構造を
もって学習という変化を捉えていくことが可能
である。まず、反応が一定しているケースをゼ
ロ学習として定義することができる。これは遺
伝的反応や単純な刺激→反応の「継接」状態か
ら、ゲーム理論に登場する高度な計算能力を
もったプレイヤーの反応に至るまで、さまざま
な複雑性をもつ適応的行動を含むが、ゼロ学習
の定義の要件となるのは、受信される情報の論
理階型や適応的判断の論理階型ではなく、試行
錯誤によって修正されることがない、というこ
とである。これに対し、学習Ⅰとは、同一と見
なされるコンテキストが繰り返し現れるのにし
たがって、反応が変化し、あるひとつの反応に
収斂していく、ということである。この例とし
ては、バブロフ的条件づけや道具的条件づけあ
るいは単純な反復強化学習などがある。つぎに
学習Ⅱであるが、例えば、さまざまな条件づけ
のパターンを読み取ることによって条件づけパ
ターン間の移行が容易になったりすることがそ
の一例としてあげられている。ここで注意すべ
きことは、パターン間の移行が可能であるだけ

では学習Ⅱとはならない、ということである。例えば道具的条件づけにおいて強化が変化すれば、学習Ⅰが新たに始まるわけであるから、反応が変化し、パターンが移行する。すなわち、パターン変化は学習Ⅰの領域内のみでもおこりうるのである。学習Ⅱにおいておこっていることは、パターンの枠づけに学習者が気づき、学習Ⅰのおこる複数のコンテキストの存在を知り、その結果コンテキスト間変化に対する反応を変化させる（上の例では、コンテキスト間移行の速度が速まる）、ということである。

ところで、人間の性格や相互作用に関して考えるならば、学習Ⅱはとりわけ重要である。すなわち、人間の相互作用を条件づけパターンという観点から枠づけしようとするとき、同じ行動が他への刺激にも反応にも強化にもなるし、自分自身の行動に対する刺激にも強化にもなり、以前の自分自身の行動に対する反応にもなる、という事実は重要である（→Bateson [1971a→1972=1987:425-427]）。これを考えに入れるならば、このような相互作用のやりとりを構造づけるのは、当人の捉え方において他にはな

い。そして、このような構造づけは、その人の過去の学習Ⅱによって形成されるといえるだろう。そしてまた、ひとたび得られた構造的パターンは、他のさまざまな局面で出現する（例えば、精神療法における「転移」現象）という。

ゆえに、人間が自らを含む相互作用状況を枠づけする構造を変化させる学習は、学習Ⅱによって得られたものを変化させる学習であるから、学習Ⅲといえる。悪循環状況などは、相互作用の枠づけの固定化によってどうにもならない状態を引きおこしてしまっているのであるから、そこからの離脱に有効な学習が学習Ⅲのレベルであることは容易に推測できる。

(7) 過剰決定 (over-determination) という概念は、ここでは行動の決定を連立方程式になぞらえるという数学的なアナロジーからとられており、精神分析学における多元決定 (over-determination) 概念 (→Laplanche; Pontalis [1967→1976=1977:308-310]) とは直接の関係はない。

(8) 志田基与師氏の口頭での御教示による。

文献

- Bateson, G. 1956 "Toward a Theory of Schizophrenia", *Behavioral Science* 1-4. →1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row =1985 「精神分裂病の理論化に向けて」, 佐藤良明他訳『精神の生態学』上, 思索社:295-329.
- 1971a "The Logical Categories of Learning and Communication" →1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row=1987 「学習とコミュニケーションの論理的カテゴリー」, 佐藤良明他訳『精神の生態学』下, 思索社:399-442.
- 1971a "The Cybernetic of 'self': A Theory of Alcoholism", *Psychiatry* 34:1-18. →1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Harper & Row=1987 「〈自己〉のサイバネティクス——アルコール依存症の理論」, 佐藤良明他訳『精神の生態学』下, 思索社:443-484.
- 1979 *Mind and Nature*, John Brockman Associates, New York.=1982 佐藤良明訳『精神と自然』, 思索社.
- 下司 孝麿 1980 「断酒会について」, 大橋薫編 [1980:199-214].
- Goffman, E. 1961 *Encounters*, Bobbes Merrill.=1985 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』, 誠信書房.
- 北條 義昭 1980 「酒害者本人にみる断酒努力」, 大橋薫編 [1980:249-264].
- Laplanche, Jean ; Pontalis, J. B. 1967 *Vocabulaire de la psychoanalyse*, Presses Universitaire de France, Paris. →1976 5e edition=1977 村上 仁監訳『精神分析用語辞典』, みすず書房.
- 大橋 薫 編 1980 『アルコール依存の社会病理』, 星和書店.
- 大村英昭; 宝月誠 1979 『逸脱の社会学』, 新曜社.
- 作田 啓一 1981 『個人主義の運命』, 岩波新書.
- 1897 「自我論のゆくえ」, 『思想』 757:1-3.
- 志田 基与師 1984 「山月記 syndrome と李徴の complex」(未発表).
- 清水 新二 1980a 「飲酒文化と社会構造」, 大橋薫編 [1980:55-70].
- 1980b 「断酒会の集団的性格」, 大橋薫編 [1980:215-230].

(いしかわ ひろあき)